カーニバル

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カーニバル

【Ｎコード】
Ｎ２０６２Ｓ

【作者名】
ゆう

【あらすじ】
幼い頃に両親を失い天涯孤独の身となった少女、ノエル。
彼女は大企業の社長の養子となり、社長の息子であるアダムと親交を深めて親友となった。
ある日、ノエルは自分の住む大陸の窮乏とした経済状況を打開するために建造された巨大遊園地「カーニバル」に、アダムと共に行くことになった。

それが、ノエルを待ちうける素敵で不思議な、過酷な運命の幕開けとは知る由もなく。

悪夢

一目で夢だと分かった。
自分の体の感覚が無く、視界は映像作品のような俯瞰視点で、窓から月の明かりが入る以外に何の照明の無い、薄暗い小さな部屋を映していたからだ。

ここは寝室だった。人が横になって少し沈んだベッドが二つあり、やはり二人の人間が穏やかな寝息を立てているのが聞こえる。
声だけを聞けば、男と女が一人ずつ別のベッドで眠っているらしいことが分かった。ちゃんとベッドを観察することで、その予測が正しいことを理解した、まさにその時だった。

忍び寄るような足音がこの部屋の外から僅かに聞こえたのだ。それは徐々に音量を上げてゆき、やがては部屋の中に入ってゆく。
この音を立てているのはどうやらこの黒ずくめの人間らしい。黒いテンガロンハットをかぶり、全身を覆い隠しその体の線を消す役目を果たしている黒のロングコートを纏い、両手には暗くてよく見えない、しかしその輪郭からして黒く塗られたナイフを逆手に一本ずつ握りしめていることが分かった。

これを認めた瞬間に予感していたことが、それほど間を置くことなく始まった。
黒ずくめの人間は小さく跳躍して両腕を伸ばし、眠っている男女の首に両手を突き出したのだ。
迸る鮮血。殆ど音を立てずに二人の人間を殺した彼――彼女かも分からないが――は暗殺者と呼ばれる職種の人間なのかもしれない。

二人の人間を殺し終えた黒ずくめの人間は早々とこの部屋を去る。

やがて、二つの首元にある大きな傷から噴出する鮮血もその勢いを衰えさせ、ただどくどくと流れるだけとなり。しばらく続いていた全身の痙攣もおさまっていく。

この異常な状況は、私の心を脅かすのには少々インパクトが足りない。何故ならば私は、この夢を何回も見たことがあるからだ。

ただ、この夢で唯一異常のある点が存在する。それは――

「あっ……ああぁっ！」

――黒ずくめの人間と入れ替わる形でこの部屋にやってきた小さな女の子。

可愛らしいパジャマを着た、まさに幼女と呼ぶのが相応しいであろう彼女は、ベッドの上の血の池に沈んでいる二人の人間を見て、恐怖と怯えと悲しみとが入り混じった表情を浮かべて顔を歪ませ、声を張り上げながら泣く。

「うわあぁぁんっ！！　おとうさん、おかあさぁぁ……！！！」

その姿を見て、ここでいつも私は気付く。

両親を殺された、哀れな小さな女の子は、あの日の私なのだと。

一日の始まり（前書き）

とりあえずこんにちは。作者のゆうです。

このお話は現在更新を停止している（ようには見えますが、実はあーでもないこーでもないとうだうだしながら続きを書いてはおります）「パレード」のひな型と言うべきプロットを元に書いております。

そのため、設定の一部がパレードと類似、もしくは被っていることがあります。僕の頭の中の引き出しが少ないことを読者さんに察しがつかれそうで恥ずかしいです。

それは置いておいて。これよりカーニバルという物語を読んで頂き、そして楽しんで頂けたらと思います。どうぞ。

一日の始まり

自然と目が開く。朝日の昇る頃、その陽光を受けた私はゆっくりと上体を起こした。

「また、あの夢……」

これで何度目のあの悪夢だろうか――呟いた後にそれを数えようとして、それが無駄であるという結論をぼんやりとした頭の中で下す。

身体を委ねている、異様にふわふわとしたベッドから横に転がって、それから素足を床につける。

柔らかい感触の絨毯が私を迎え、そのまま豪華な装飾の付いた背の小さなタンスへと足を運んでいく。

まずはこの服を着替えなくてはいけない。

見慣れているとはいえ、正直な身体は大量の汗を流すという反応をしている。

それにこれはパジャマだ、このまま外に出歩くことなどできない。そんなことをしたら確実に変な人間であると思われてしまうじゃないか。

全部で四段あるタンスの中から下着を変え、それから私はアダムに買ってもらった黒色のワンピースを手にとって、それを身につける。

――黒って、女の子の魅力を引き上げる色なんだって――頭の中でリフレインするアダムの無垢なその言葉は、私に今日はこれを着て外出させることを促した。

そういえば、今日はどこかへ行く予定があったはずなのに、それを思い出すことが出来ない。

……健忘症にでもかかっただろうか。それならば少しまずいことになる。

私にあてがわれた部屋は大きい。表すならば十畳ほどの広さだ。が、やけに大きくピンクの天蓋が付属している異常な柔らかさを誇るベッドのせいで、この部屋の広さは少しばかり減ってしまっている。

だから私は、このベッドは仕方ないことにして、背の小さなタンスや型の小さなテレビ、多くを内包出来ない本棚やカラーボックスをこの部屋に置くことにした。

そうしなくても人並み以上に広い部屋をあてがわれている、そう述べる人間は多いだろう。

しかし――私はこんな生活を送ることに確かな疑問を抱いている。

私が幼い頃、両親は何者かによって殺されてしまった。

どうやら私は、後から伝え聞いた話を元にしてあの悪夢を見ているようだが、そんなことはどうでも良い。

私の父親と友人関係であるアダムの父、ジェームズ――クロイス・コーポレーションという、あらゆるものの製造と販売を手掛ける巨大企業の社長――が、引き取り手のいない私を養子として引き取ってくれたのが、今の生活の始まりだ。

気付けば私は、衣食住の何一つ欠けていない、不自由のない生活を送っていた。ジェームズの息子であるアダムは私の友人となり、今でも良い交流を続けている。

そんな生活を送れるのは、まず第一にジェームズ・クロイスのお

陰だろう。
そして、私の両親が死んだお陰で、そして父親がジェームズと交流を持っていたおかげで、私はこうして生きることが出来ている。

最低だ。人の死を、それも両親の死を契機という名の糧にしてこんな生活を送っている。
それを忌み嫌っているはずなのに、マスコミもこれしか言うことのないくらいに存在感を放っている不景気で喘ぐ、この第五大陸「カーディナル」の中の世間という外の世界に出ることを恐れるがゆえにこの境遇に甘んじている。
最低としか言いようがないだろう。ついでに言えば、最低としか言葉の出ない私の語彙の無さも最低だ。

それを一度、アダムに吐露した事がある。私は最低な人間であり、もしかしたら生きている価値などないのかもしれない――
今思えば、これをアダムに話したところで何が解決するでもなく、それどころか彼にとって迷惑極まりない話だというのは分かる。
当時――ちょうど今から一年前、外では夏休みで浮かれている私と同じくらいの歳の若者たちが跋扈していた時――高等学校の一年生をしていたアダムが、夜になって私と他愛のない話をしていた時に、何かの拍子で私は彼に言ってはいけないことを言ってしまったのだ。

彼は誰かが死にたいだとか、殺してやるとか、そういった言葉を聞くのを非常に嫌う性質にある。
いや、ネタや冗談で言うのならば、それを識別する能力をアダムは持ち合わせているのでそれには反応しない。
だってそうだろう、テレビのモニターでは今流行りの二人組の芸人がお互いに殺してやるとか、コンクリ詰めにして海に沈めてやる、などと乱暴な言葉を吐いてアダムの笑いを取っているのだから。

しかし――あの時の私は、心底死にたいと思っていたのだ。
それをアダムは、平手でも喰らわせたかったに違いない所を、優しくこう言ったのだ。
――君が死んで悲しむ人間はたくさんいる。少なくとも一番近くに、僕がいる――

その言葉を貰っただけでとても嬉しかったのに、それで満たされたはずなのに、時折私は自らを最低の人間であると判断を下してしまう。
こんなことをしてもアダムと私が悲しむだけだというのに――この心の中の自傷行為は、いつしか私を私たらしめる要素の一つとなってしまっている。

そんな私を、私は許すことが出来ないでいる。

食事は一階にある、天井から吊るされた黄金の大きなシャンデリアがよく目立つ、やたら長いテーブルを三台並べ、それを覆うように非常に長いテーブルクロスを敷かれているテーブルが印象的な食堂で頂くのが生活の一部となっている。
ついでに言えばこの食堂は、朝と昼の間は殆ど照明を使っていない。
何故なら天井がガラス製で――それが大きく広がっているので、

日光を取り入れ、それをもって照明とすることが容易なのだ。
節約こそが経済回復の礎である。これをスローガンに、この貧しい大陸であるカーディナルを立ち上がらせるためにも存在している大企業、クロイス・コーポレーションは成長していったという。
その社長が住む豪邸なのだ、こういった工夫のある部屋を設計させたのは必然と言えるだろう。

そんな食堂にて、私の左隣にアダムが座って眠そうな瞼をこすりつつ、バターを塗られふっくらと焼きあがっているトーストを口に入れるのもまた、日常である。
だいたい、いつも朝食のメニューは決まっている。
一流のホテルで出るグレードの食パンにバターを塗ってトーストしたものが一枚。色とりどりの新鮮な野菜に有名なシェフが特別にレシピを書いてくれたのだという透明なドレッシングをかけた野菜サラダ。後は日替わりでデザートとしての果物が変わるだけだ。

着替えを終え、一階に降りて食事を取る私だが、この日は何かが違っている気がした。
いつもはチェック柄の上下のパジャマを着ながら、例のようにだらしなく朝食を食べるのが日常と化していたアダムが、どういうわけかよそいきの服を着て変わり映えのない朝食を取っているのを見て、それが違和の元なのだと悟る。
「どうしたのノエル、そんな変な顔をして」
アダムは自分が何をやっているのか分かっていないのだろうか？
これは事件だ、大事件だってのに！
「……アダム、パジャマはどうしたの？」
「今日は早めに外出するからね。ほら、ノエルも急いで食べてよ」
アダムに急かされ、いつもの定位置の椅子に座って私も手と口を動かし始める。

レタスとトマトをフォークで刺して、ふと何かを疑問に感じた私はアダムの方を向いて言った。
「そういえば、今日はどこに外出するんだったかな」
「え？」
「いや……何か忘れているような気がして」
「ちょっと……忘れたの？」
残念そうな顔を浮かべるアダム。口元には透明なドレッシングがくっついている。
そんな顔を見ると何か悪いことをしたような気がして、思わず目をそらしてしまう。
「ごめんごめん、そんなに責める事じゃ無かったよね」
「あぁいや、こちらこそごめんな」
「ううん、謝らないでよ。それより、ちゃんと話すから聞いていてね」
それから少しの間だけアダムは間をおいて、それから口を開く。
「今日は僕達、カーニバルに行く予定だったじゃない」

カーニバル。半年前から様々なメディアを通しての宣伝が行われており、それよりも昔に人々はこの名を聞いたことがあるだろう。
今から三年前。世界調整機構――私たちの生活の中では、アルファベット三文字を並べてＷＰＯと表される――は、クロイス・コーポレーションが大々的に支援をするという形で、十二に分裂してしまった大陸の内で五つ目のそれである第五大陸「カーディナル」の経済支援計画を記者会見で発表した。

その時の記者会見のことはよく覚えている。
当時十四歳であった私にとってはあまり把握することは出来なかったのだが、それでもアダムの父がテレビに出るというので、彼と二人でかじりつくようにテレビ画面に見入っていた。
だから、記憶に焼き付いていて当然だ。

その支援計画の内容とは、恒久的に存在して経済効果を生み出す為に巨大遊園地を建造するというものだ。
子ども心には響くものが大きかった、だが――それはあまりにも非現実的なものであると大人達にはバッシングされた。
今考えるとそれは当り前のことだったとは思う。
深刻な不景気に悩まされている第五大陸カーディナルを救うべく作りだすのが遊園地でしたと聞かされて、大人達がふざけるなと怒鳴って怒っても当然だ。
だだ、当時の子供たちが大きな遊園地が出来る、とても魅力的な施設が出来るということだけに喜んでいたわけではないとは思った。
この会見において一番熱が入っていたのはほかならぬジェームズだったから、そんな確信めいた直感を持つことが出来た。

ジェームズが外に出る時に必ず身につけている物がある。それはとても長い白のマフラーだ。
黒のスーツにそれを纏い、独特の雰囲気を醸し出したジェームズは、自らが発言する番になってこう宣言した。

――企業として社会に貢献することは常識です。ですが、それ以上に本来あってはいけない動機で私は動いています。
私は自分が生まれた大陸を末永く、つまりは私が死んでからも守っていきたいのです。記者の皆さんが驚かれるのは無理もありません。
今回の経済支援計画は本来のＷＰＯが行うような支援政策の形を

取らず、巨大娯楽施設を建造してそれをもって経済の回復を見込むという、いわば子供の発想です。それを最初に提案した私もまた、子供でしょう。
しかし……何かをやるのであれば、末永く残るような形を持った何かを作った方がいいでしょう、その方が下手な政策よりもよっぽど良いです――

彼の養子として生きていた私は、当然ながら彼に感謝の念を向けていた。
だってそうだろう、私の父と交友があった程度で、その友人の遺児を養ってやろうなど誰が考えるものか。
そんな私の考えを裏切ったジェームズに対し、その日から私は尊敬の念も向けるようになった。
本来あってはいけない、いわゆるタブーを犯すことの重大性など把握できないが、自分の生まれた大地を、大陸を守りたいだとか救いたいという気持ちは尊いものであることを知っているからだ。

そのカーニバルは西暦２９０７年８月２７日に開園が予定されていて、予定通りに開園はされた。大きなバッシングは受けたが、客足は順調に伸びていると言われていて、ＷＰＯの予測よりも多くの人間が来園したようだ。
この計画を率先して引っ張ってきたジェームズの真摯な思いはこの成功をもたらした要因の一つだと、私は思うことにしている。
そうすることで、何かを熱心に続けることはそれをうまく成就させることに繋がるのだという思想を自分に植え付けるためだ。

それに、ちょうどそれは今日の日付である9月1日に位置づけられている「ＷＰＯ発足記念日」の五日前のこと。
この記念日を受けて、クロイス・コーポレーションの社長であるジェームズと共にカーニバル建造計画を推進してきたベイカー・グランツが演説をするのだという。

このベイカーという男は、元はＷＰＯカーディナル支部の役人で、会社の立場に例えると平社員のような人物だったらしい。
しかし、ベイカーはジェームズの活動を見る中で、自分から精一杯の支援を続けていったという。
それが彼をこの経済支援計画の成功の立役者の一人として数えるに至ったそうだ――というのがアダムから聞いた、どこか薄っぺらい情報だ。
だがそれは仕方ないだろう。だって、つい最近になって私はベイカーの名を聞いたのだから。

このカーニバルに遊びに行く。
今日は9月1日。多分アダムはカーニバルに遊びに行くのもそうだが、実はベイカーの演説を聞きに行きたいのではないか――そんな推測を立てながら、私はアダムの顔を見ながら言う。
「そうか、今日はカーニバルに――」
「ノエルはその黒いロングなワンピースで決まってるから、もう着替える必要はないと思うよ」
私の発言を遮るように、アダムは微笑みかけながらすらっとそんなことを言った。
「そうか？」
「だってさ、凄く似合っているんだもん」

うんうん、と頷きながらアダムは言った。
素直なその言葉はとても嬉しい。
だって、誰かから服が似合っているとかそういうような事を言ってもらえるのはとてもいい事じゃないか。

外出前後

私が足をつけて立っているのはこの世界を統括している巨大組織である世界調整機構――多くはＷＰＯと呼ばれ、表記されることが多い――が定めるところによると、第五大陸「カーディナル」である。

元は深紅色や緋色を表わす言葉なのだが、これが示すところは紅寒鳥と呼ばれる赤い鳥なのだという。

ＷＰＯはジョークを効かせたつもりか、十二の大陸全てに鳥の名を冠させている。

例えば、ＷＰＯの本部がある第一大陸なんて孔雀を意味する「ピーコック」という名がついている。ＷＰＯ本部のある第一大陸でこうなのだから、他の十一の大陸もまたこのように鳥の名を冠しているのは当然のことだろう。

さて、カーディナルという名の大陸の形はよくトランプのダイヤのマークに例えられるという話をアダムから聞いたことがある。

事実カーディナルは歪な菱形をしている。不格好なダイヤのマークと例えるのは間違ってはいない。というよりはこの例えを打ち出した人物のセンスを評価すべきだと思う。

周辺を海に囲われた、山岳による起伏の少ないダイヤのマーク。これがカーディナルだ。

カーニバルは、カーディナルの中央に位置する広大な平原の上に建造された。

元よりそこに生活を営む者の姿などは無く、いや、肥沃な土地でない場所に誰が住むのだろうかとは思うのだが、とにかくその土地を使うことによって生じる不具合は無かったという。

というのが、朝食を取った後に自室に戻って外出の準備を整える際に、中等教育の過程で購入を義務付けられた地図帳を広げて眺めながら考えていたり、思い出したりしていたことだ。
カーニバルについての情報ならこれには載っていない。後でアダムに尋ねた方がよさそうだ。一般人にしてはカーニバルについてよく分かっているところがあるし。

それも大事だが、もっと大事なことがある。それは服装についてのことだった。
身につけている黒のワンピースは袖が肘のあたりまであり、足首のあたりまで丈が届く長いものなのだが、胸元のあたりが少しだけ開いているような気がしてならない。
アダムがそんなことのために似合っているだとか言う訳がないのは分かっているのに、それでも私は少なからず羞恥の念を抱かざるを得なかった。

夏も終わるこの9月。肌寒くなってきた季節の中、露出の多い服が風邪だとかの病気を呼び込むことは間違いない。
何かおしゃれな上着を着ていこう。そこに思い至った私は同時に時間があまり残されていないことに気付き、タンスやクローゼットを乱暴気味に開け閉めしてあるものを見つけた。

それは白の薄い、腿のあたりまで丈が伸びている上着だった。透明なボタンが四つ縫い合わされており、これをもってきつくしたり緩くすることが出来るようになっている。
これくらいがちょうどいいかもしれない。身体にごちゃごちゃしたものを身につけるよりは、こうしたシンプルなものの方が良いに

決まっている。

こうして着替えを終えて軽い外出の準備を済ませた、急いで階段を下りて廊下を走り、玄関の靴箱から黒の皮靴を取り出してスリッパからそれに履き替えて少し重い両開きの玄関の扉を開ける。

晴天の下、外に出てすぐの所でアダムが立って待っていたのが見えた。

「ごめん、待ったか？」

「ううん。ちょっと前にここで立っていただけだから」

そういうアダムの姿は、食堂で見た彼の服装が少しだけ何かが加えられていた。

白いシャツに赤色のネクタイの姿は彼のよそ行きの服装の基本だ。それとチノパンという、どちらかと言えば日常生活で穿くようなズボンを穿いてある種のギャップを生みだしている。

そこに……そうだ、さっきから何かが鋭い光を放っていると思えば、指輪がそうなのか。

シルバーの指輪がアダムの右手の左指にはまっている。いや、もしかしたらシルバーに見えるだけのプラチナなのかも――

「それより行こう。電車が出ちゃうよ」

――と考えていると、アダムはそう言って先を歩いてしまった。

っと、ちょっと待てよ。

「ちょっ、ちょっと待ってくれ」

「なに？」

「電車って……アダム、大丈夫だと思うか？」

「なにが？」

「いや、だから……圧死しないか？」

アッシュ？　灰？　とアダムはとぼけた返事を返してくる。

「あっ、し！　今の時間考えてみてよ、朝の八時だよ」

「あれ、じゃあ急がないと」
「だから！　この時間じゃあ人多すぎで電車なんか乗れるわけがないでしょってことを言ってるの！」
　つい感情的になって怒鳴ってしまった。アダムなら、カーニバルについてある程度は詳しい彼ならば、これの人気のお陰で公共の交通機関に支障をきたしているのかは分かっているはずだと思っていたのに……
「じゃあ……どうする？」
「どうするって言われても……」
「運転手さんも、今日はベイカーさんが演説をするって言うのを知って、みんなして前から休みを取っちゃってるからいないよ？」
「そうか……私達、どちらも免許を取ってるってわけじゃないからな……」
　車の台数だけは多くあるというのに、これを運転できる人間がいないというのは正直きつい。
　アダムの父であるジェームズに頼ろうかと思ったが、その彼もまたカーニバルで一仕事があるので不在なのだ。
「そうだ……お手伝いさんとか、警備の人を頼ろう」
「それは駄目だよ。あの人たちにはこの家の留守を守ってもらわなくちゃ」
「じゃあ八方ふさがりじゃないか！」
　堪らず、私は叫んだ。
　なんだよアダム、もう少し計画性を持ってくれよ。女の子とどっか――この場合はカーニバルに行くんだぞ？　だったらもう少し計画らしい計画を立ててくれ。君にとってはベイカーの演説を聞けるだけで満足かもしれないが、こっちは遊園地に遊びに行くってので内心喜んでいるんだぞ！？
　と、声に出さぬ魂の叫びを心の中で荒げながら、しかし爆音が開いている門の外の方から聞こえてくるのに気付いてびっくりする。

この玄関から少し背の高い白塗りの壁と分厚い木の板からなる大きな門を結ぶ距離は十数メートル。その道の両脇には芝生が貼ってあって――いや、それは関係ないか。ちょっと距離があるというのにここまで爆音を響かせるというのはどうなんだ？

あまりにもうるさいからか、滅多なことでは怒らないアダムも顔をしかめているのを見ているとその音が止み、それから赤と黒のツートンカラーのぴちぴちしたライダースーツを着た背の高い男が私たちの前に歩み寄ってきた。

さっきまでの爆音はこいつのバイクか――そんなことを考えていると、ライダーの男はライダースーツとおそろいの赤と黒のフルフェイスヘルメットを脱ぎ、その素顔を露わにする。

短い金髪をオールバックの髪型でまとめ、鼻の下の無精ひげを生やして精悍な顔つきをした、ぱっと見る限りでは三十台前半の男性がアダムに向かって言う。

「アダム君、君は隣にいるノエルお嬢さんとカーニバルに行くんだよな？」

「え？　……えぇ、そうですけど」

どこか弱弱しく、しかし棘を忍ばせたような口調でアダムは答える。

仕方がないだろう、見も知らぬ男が自分の予定をまるで占い師のようにずばずば言い当てられるなんて、気分が悪くなって当然だ。

「まぁまぁそう焦らない怒らない。あと、女の子とデートをするならもうちっと計画を練った方が良いな」

「はぁ？　デート？」

アダムの困惑した返答に、ライダースーツの男は面白くなさそうに違うのか、とだけ言って間を開けずに続ける。

「君のお父さんから頼まれてね。アダムとノエルをカーニバルまで送ってやってくれってさ」

そう言って男はライダースーツの小さなポケットから小さな紙の

ようなものを取りだした。
いや、それはホログラムを投影する――何と言っただろうか、その装置の名は。
「ハンド・ホログラム・プロジェクター……これ、うちの試作品じゃあ……」
「略称はＨＨＰってんだろ？　ただじゃ信じないだろうと言って、ジェームズから譲ってもらったんだ。カッコいいだろ？」
男はそう言いながら右の手のひらに載せている小さな機械を、まるで高級な食器を取り扱う感じで丁寧に繊細に操作していく。
すると、その機械から一つの不思議な映像が浮かび上がってきた。不思議とはいっても、この男の名刺のようなデータだったのだが。
「俺の名前はポール・グリーンフィールド。アダム君の父親のジェームズのボディーガード兼友人ってとこだな」
「そうですか……初めまして」
アダムがどうにか言葉を放つことが出来たのを見て、私も軽くお辞儀をする。
「二人ともそんな堅苦しいのは抜きだ。それよりほら、何か適当に車を選んでさっさとカーニバルに行こうぜ？」
……この男は一体何歳で何者なんだろう。冗談抜きでボディーガードを職業としている人間に見えないのだが。

カーニバルへ

ポールと名乗る男と出会ってから十分も経たない内に、私とアダムはポールが運転する車の後部座席に座っていた。
今はもう珍しいＡＧＶ――反重力車両の総称だ――ではない、四つのタイヤを使って走行する軽自動車と呼ばれるカテゴリの白い車の乗り心地はまぁまぁ良い。
車に置いているペパーミント系の芳香剤もいい具合に機能していて、長らくこういう車に乗ったことのないことによる緊張感を和らげてくれる。

私は自分のものである小さなショルダーバッグを腿の上に載せ、左隣でどこか緊張している様子のアダムの横顔を見る。
もしかすると、自分の父とかかわりのあるというポールを前にして緊張する部分があるのかもしれない。

シートベルトを装着しているのにもかかわらず、アダムの体は上下左右に揺れ動いている。それは私も同じことだった。
どうして私達が揺れ動いているのかはすぐに分かった。
樹海といえばいいのか、車は道を木々に囲まれた山道を走っており、しかもその山道は舗装されておらず、砂利などで若干荒れていたからだ。
そうだ、ポールは誰も使っていないような道を通って渋滞を回避すると言っていた。そうか、それはこのことだったのか。
鬱蒼とした森が不安感を煽ってくる。手のひらにじわりと汗をかいている感覚を覚え、ギュッと両手を握りしめた。

第五大陸カーディナルの形はまるでトランプのダイヤのマークだ、という例えがあるのは知っている。
だが、まるで乳首のような形もしている、といういう例えは今知ったばかりだ。

その例えを口にしたのは、赤と黒のツートンカラーのライダースーツを着ながら軽自動車を運転するポールだった。
いや、乳首って……と、アダムが困った顔をしながら言ったのが印象的だった。
彼はどうも、男友達とのこう、なんていうのだろう――性的な、いわゆる下ネタを交えた会話を苦手とする節がある。

困惑しながらアダムの言葉にポールは、自分はただ乳首というワードを出しただけだというような意味のことを言った。
私はそのやりとりを見ながら、確かに乳首という表現は的を得ているかもしれないと考えていた。

事実、歪な菱形の形をしたカーディナルという大陸は、その中心に近づくにつれ高度があがっていく。
そこに特別高い山があるわけではない。山はあるにはあるが、その向こう側にカーニバルが建造された平原があるだけだ。

だから、中心に近づくにつれて高度が高くなっているカーディナルの姿を乳首と例えたポールは、もしかしたら頭が良いのかもしれないと思った。

「この山道もあと半分だ。そうだ、カーニバルについたらやりたいことは決まっているのか？」

不意にハンドルを握るポールが後ろにいる私達に問いかけてきた。
会話のない、少し寂しいこの状況を打ち破ろうとしてくれたのだろう。その心遣いに感謝して、考え込むように唸っているアダムが発言する前に私は口を開いた。
「あまり私はカーニバルに詳しくないんだけど、とても大きな観覧車があったはずだから、それに乗ってみたい」
テレビのCMの映像では、私の言った大きな観覧車がとても目を引くような構図で映しだされていた。
他にも色々遊んでみたり乗ってみたりしたいものや、この目で直に見てみたいものがたくさんある。観覧車はそのうちの一つだ。
「観覧車かー、デートの定番だよな」
振り返らずに――この場合は振り返られないというべきか――ポールは明るい口調で答える。
その表情が見えないので、にやけながら言っているのか苦虫を噛み潰したような顔をしながら言っているのかは分からなかった。
「アダムとは……別にそういう関係ではないんだけど」
でも、これだけははっきりさせておかないと。
この年頃の男女がペアになって組んでいれば恋人同士であるとみなされるらしいが、私達はそんな間柄ではない。
「だってよ。嫌われちゃったなぁアダム君」
「でも本当にそんな関係じゃないですよ。いつも楽しく話をしたり、何かゲームとかやったりして」
私の立場に寄った発言をするアダム。彼の言った言葉に嘘偽りはない。

というよりは、アダムが私を少女として見てくれたことがあっただろうか。
その答えは多分ノーだ。人並みに女性らしい体つきをしているというのに、アダムはそれに触れるような発言をしなかった。
それに、前にパーティか何かで露出の多い服を着せられたことが

あった時だって、アダムは恥ずかしがることなく私の目を見つめていたのだ。

「こんな黒髪ロングの美少女連れて何やってんだよアダム君よぉ、きっと彼女だって君のことは悪くないと思ってると思うぞぉ？」

ポールには何かが致命的に欠陥しているらしい。

困った顔をしてうーん、と悩むアダムの姿を見て、少しだけ苛立ちを覚える。

「多分そうだとは思うんですけどね。でも、ノエルとはずっと友達で……親友でいたいんです」

芯の通ったアダムの言葉を聞いたポールは、そっか、と短く返した。

それは落胆したとかそういう類のものの「そっか」ではない気がする。どこか、そういうものなのだと割り切られた感じがした。

それから私達はいろんな話をした。

私とアダムがどれだけ仲の良い友人同士であるかを示すためにいくつものエピソードを語り、ポールはハンドルを握りながら真剣そうに相槌を打った。

その後に、ジェームズとポールが本当に友人関係にあるのかという質問や、いつもそんな軽い態度でいるのか等と色々聞いてみた。

どうせポールとはカーニバルに到着すればお別れだ。ぶしつけな質問をしたところで何か不都合があるわけでもない。

「そうだなぁ……ま、ジェームズは俺のことを気にいってくれているんだ、腹を立てたことなんて一度もないんじゃないか？」

自信に満ちた声でポールは答える。この自信は一体どこからわき出てくるのだろう。

「じゃあ、ジェームズさんはポールのどこを気にいったと思う？」
「そりゃあ……俺が滅茶苦茶強ぇからよ。あとはこの気さくなキャラクターだろうな」
それを自分で言うか？　自信満々に喋るこの運転手に、どこか苛立ちを感じてくる。
「もっとノエルちゃんも自信を持ちな。そうすりゃ、生きるのがもっと楽しくなるぞ」
あんた自身の存在がギャグだろうが、そりゃあ楽しくもなるだろうよ。
――言いかけた言葉を飲み込み、私は適当な愛想笑いを浮かべた。

そんなことをしているうちに、あの樹海のような山道が終わり、割と平坦な道を軽自動車は走っていく。
相変わらず道は舗装されていないが、あの山道ほどは酷くはない。
窓を閉めているというのに。野菜畑の土のような匂いが鼻をついた。何かと思って私は右を向いてみる。
この道を挟んでいるのは何かの畑だった。多分ここで、カーニバルへ供給する食材を得ているのだろう。
「あっ、畑だ」
「多分野菜とかを育てているんだろ？　こんだけ広かったら滅茶苦茶とれるだろうな」
アダムとポールがそんな会話をする。この二人の会話を聞いて、私の推測は多分当たっているのだろうなと考えた。
既にカーニバルの外観の一部は見えている。
どこの馬鹿が設計をしたんだと突っ込んだことのある、観覧車に並ぶトレードマークの、やたらと高い塔の先端がそれだ。

アダムが私に話してくれたのを思い出す。
確かあれは、数ブロックに分けられているカーニバルを結ぶための塔であるらしい。
意味は分からないが、アダムはそれを「コネクションタワー」と呼んでいた。多分それは公式の名称だろう。

コネクションタワーを見ていた私は、心臓の鼓動がいつもより早くなっているのを自覚した。
いよいよカーニバルに近づいている。きっとそれが原因なのだろう。
カーニバルについてからの予定は、ある程度アダムが決めている。ここは彼に任せて、私は思い切り楽しんでいこうと思った。

入園

カーニバルについて簡潔にまとめてみよう。

カーニバルとは、全部で三つのゾーンからなる巨大遊園地だ。
ＷＰＯとクロイス・コーポレーションが手を組んで建造した、第五大陸カーディナルの経済支援政策の要ともなっている。
第五大陸カーディナルの中心に位置し、少々険しい地形ながら交通の便は整っており、行くこと自体は容易い。

広大な台地を大規模な円形に開発しており、その中に三つのゾーンと一つの塔が綺麗に収まっている。
ちなみに、私たちの住んでいる都市「クレスト」はＷＰＯのカーディナル支部を有している。
クレストは大陸の南の方に位置しているため、ここからカーニバルに行くには北上して接近するルートしかない。
もっとも、ポールが選んだルートは少し違うものだったようだ。
カーディナルに１７年も住んでいる私が知らないルートというのが、少し気に食わないが。

カーニバルは北と南東と南西に三つのゾーンを形成しており、それらを結んで出来る正三角形の中心に位置するコネクションタワーで構成されている。
広大な台地を大きく開発し、三つのゾーン以外には池を作ってしまっている。
そのために、各ゾーン間の直接の往来は船を使うかコネクションタワーを使うしかない。

ゾーンについては、北にある第一ゾーンが遊園地のゾーン。

南東にある第二ゾーンがレストランのゾーンであり、南西にある第三ゾーンがお土産屋のゾーンとなっている。

このように「ここにはこれがある」ということを明確に打ち出しているこの設計がある。

これによって、多くの客が来てもカーニバルのシステムがパンクすることなく通常営業が出来るようになったという。

また、コネクションタワーはこれら三つのゾーンを結ぶ役割を果たしている。

どうでもいいことだが、コネクションタワーには別名がある。

別名は「中継塔」というのだが、こう呼んでいるのはいちいちコネクションタワーと呼ぶのが面倒くさくなっている人達だけだ。

――というのが、車を降りてからカーニバルの受付までコンクリートの駐車場を歩いている最中に、アダムが私に教えてくれたことだ。

ジェームズのボディーガードを務めるポール・グリーンフィールドは、私達をカーニバルまで送る運転手の役目をジェームズから与えられていた。

陽気な彼のトークと共にカーニバルに到達したが、目的地に着くなり、そろそろ仕事に戻らねぇといけねぇと言って彼は駐車場を去ってしまった。

ポールが私達を降ろした場所は駐車場の外だった。

それは三つのゲートに隣接する三つの駐車場が満車状態であることに起因する。

車を降りた私達は、南西にある第三ゾーン――お土産ゾーンとも呼ばれるらしい――の前にある駐車場を歩いていた。
駐車スペースは親子連れやカップルに見える人々が見えた。
多分、誰が彼らを見ても、幸せそうな人たちだと思うだろう。
カーニバルは駐車場というロケーションですら笑いと笑顔の絶えない、そんな力を有しているらしい。

その他にも、駐車場はＡＧＶで埋め尽くされていた。
ＡＧＶには新しいモデルや古いモデルというものはあるのだろうが、どれもこれも流線形のフォルムを有しているためにメーカーごとの違いが分かりづらい。
性質の悪いことに「このメーカー製のものです」ということを示すエンブレムも目立たない場所にある。

そんな駐車場を歩き渡って受付まで行くのに、どれ程の時間がかかっただろうか。
それについては分からないが、結構な時間がかかったというのは間違いない。
距離自体も長かったように思うし、結構な数の人間がいたのでなかなか進めなかったというのもある。

駐車場と受付を繋ぐ、多くの人間が出入りできるように幅広く設計された石畳の通路を歩く。
四方八方を多くの人間が囲み、それらはごにゃごにゃとした大きな声を立てていく。
ざわめき、と呼んだ方が良いのだろうか。
それのせいで、隣で離ればなれにならないように手を繋いでいるアダムとすら会話が出来ない状況だった。

背の高い人間の頭が前方の頭上を取って、視界を大きく妨げている。
しかしカーニバルを設計した人間は頭が良いようだ。
馬鹿みたいに縦に大きな標識を作り、それを設置している。こういう標識の使い方は良いと思った。

その標識によれば、百メートル先に二つ受付ブースがあるとのこと。
デザイン性の低い簡潔な絵柄の標識だったが、それ故にダイレクトに何を示しているのかが分かりやすい。

しばらく歩いて、私達は左手にある方の受付ブースの前に立つ。
ブース内には可愛らしいピエロ風な衣装を着こんだ少女達がいる。
彼女達が来園客と受付のやり取りをしているようだ。
「あっ、大人二名の入園チケットを下さい」
アダムは一人のピエロにそう言う。
受付事務を手早く済ませたいのか、彼の言葉には鋭さを含んでいたように思えた。

あまりにも回りがやがやしていて、応対したピエロの少女――私ほど長くはない金の長髪と碧い眼を持っていて、綺麗な人形を彷彿とさせる――が口を動かしながらチケットをちぎるが、何を言っているのかが分からない。
だが、その手際の良さはお見事と言えるものだった。
素早い動作でチケットを二つちぎってアダムに渡す。
次にアダムの差し出したお金を見て、レジスターを使わずに瞬時に正確にお釣りを渡す――彼女こそ、この仕事のプロだと思った。

チケットを受け取ったアダムと共に前に進み、受付とカーニバルを繋ぐ大きな木製の吊り橋の前にやってきた。
吊り橋の下は海と見まがうほどに大きな池が広がっている。
その水質はとても良いようだ。透明度が高く、底が見えるのではないかと思う程に透き通っている。
「ノエル、危ないよ！」
手すりの傍を少しだけ身を乗り出して歩いていた私を、怒ったような顔をして注意するアダム。
その表情とよく聞き取れなかった言葉に、私は謝る意味を込めて頭を下げる。

そうしているうちに、私達は吊り橋を渡り終える。
吊り橋が終わった先には、時代錯誤ともとれるほどにレトロな景色が広がっていた。
白い石を切って作ったのであろう石畳の地面。設計者は既に死んでいそうな赤い煉瓦造りの大きな建造物たち。
ＣＭで見たことには見たが、現物と比べるとショックが大きすぎる。
「どうしたのノエル、そんな変な顔をして」
こちらの顔を覗き込むようにして見つめながら、アダムが笑顔を湛えてそう尋ねてきた。
辺りを囲う人の数が減ったからか、ようやく普通に彼の声が聞きとれるようになったのを自覚しながら口を開く。
「いやだって……すんごく古臭くないか？」
「十代世紀前半あたりの、ヨーロッパと呼ばれていた辺りの大陸の街をモデルにしているらしいよ」
「へぇ……じゃあ、ドイツとか？」

あてずっぽうに大昔に存在した適当な国名を上げる。
するとアダムは目と口を大きく開き、心底驚いたという風に口を開いた。
「そうそう！　メルヘン街道とか、ああいう感じの……よく知ってるね！」
適当に言っただけなんだけど、とは言いたくなかった。
ちっぽけなプライドを守るためではない。アダムががっかりする所を見たくなかったのだ。

白い青年

カーニバルの第三ゾーン、通称お土産ゾーンにまだ用は無い。
園内をぶらつくのに、片手にお土産の袋をぶら下げているのは都合が悪いからだ。

私以外の人々もそう思っているらしく、きょろきょろしながら足早にコネクションタワーの方へ向かっていく。
時間が経つとともに、私の横を後ろから早歩きしていく人々の数が減っていく。
それは、私達もコネクションタワーを目指していないとはいえ、前に向かって進んでいるからといえるのだろうが。

コネクションタワーを目指さないというのも、アダムが一人になりたいと言い出したからだ。
アダムはクロイス・コーポレーションの社長の一人息子だ。何かと不自由もある。
例えば、一人になりたいというのは用を足したいということを意味する。
まぁそうだろう。何かを恥ずかしがらなければ、こんなふうに暗号めいた会話なんてしない。

さて、アダムが探し求めている場所はいくらでもある。
ゾーンの中心にやたらと大きな噴水があり、それを囲うように等間隔に大きな煉瓦造りの建造物がある。
それらは全て何かしらの商品を取り扱っており、当然のことながらアダムが探している場所だって用意している。

もっとも、私がこんな風に考える義理もないが。

素直にトイレに行きたいって言えよとは、思っていても言えないのだけれど。

第三ゾーンの西側に、カーニバルの見どころの一つとなっている広大な池を眺める施設がある。
施設とはいえ、そこまでしっかりしたものではない。
見晴らしがいいように設計された高台に、公園とかでよく見かける、三人用サイズのベンチがたくさん置かれているだけの場所が、その施設だった。

アダムには、私がここで待っているという話はつけてある。
短い間でも、あの綺麗な池を見ることが出来るというのはとても魅力的なことだと思えた。

私は駆け足でこのゾーンの西側にある高台へと昇る。
池に落ちないように施工されている背の高い柵の一歩手前で立ち止まり、私は息をのんだ。

やはり透明度の高いこの池は、私の心を奪うのに十分な魅力を持っていた。
どんなに顔の良い男性アイドルが相手でも、この池には敵わないんじゃないだろうか。
陽の光をきらきらと照り返し、そしてさざ波で揺らめかせていく。
ただそれだけの池なのに――やはりカーニバルには、不思議な力があるようだ。
「綺麗ですよね、その池」
不意に、後ろから男の声が聞こえた。
周りに人はあまりいない。それに、池の方を熱心に見つめている

のは私だけだ。
この言葉が私に向けられたものだと気付くのに少し時間がかかったが、素早く振り向く。
白髪に見えるような短い銀髪を持った、白いスーツを着た青年がベンチで脚を組んで座っていた。
……こんなのは漫画の世界にしかいないと思ったのだが。
この青年は、何もかもが白かった。
ネクタイの色も白かったし、肌の色も白い。
眉毛なども白に近い色であったし、しかし目だけは私と同じ黒いそれだった。
「あぁ、凄い化粧をしていると思っているでしょう」
男がそっけなく言った言葉は、私が頭の片隅で考えていたことだった。
「でもね、これが素なんです。生まれた時からこんな感じでね」
その言葉を聞いて、この男がやはり奇妙な存在であることを確信する。
カーニバルに来ておいて、バッグの一つも持たないとはどういうことなのだろうか。
彼が付き人を雇えるような身分の人間だとすればそこはスルー出来る。しかし、しかしだ。
前にアルビノという存在のことを聞いたことがある。
アダムはこれを詳しく語ってくれたような気がするが、あいにくそこまでのことは覚えていない。
ただ、体中が真っ白になって生まれてきた人間というような意味合いだったような気がする。
目の前の青年は、それに近い存在なのだろうか。

「あなたは……」
「あぁ、そんな他人行儀でなくていいですよ」
え？
「あなたは常に恐れている。故に、親しい者に対しても攻撃的な口調になっている。でしょう？」
何を言っているんだこいつは。
こいつの言ったことは大体あっている。でも、どうして私の事を？
「んー、今のあなたは混乱している」
白い青年は私を諭すようにゆっくり語りかける。
その表情に、違和感のある穏やかな笑みを浮かべて。
「そうですね……簡単に言うと、あなたは他人が怖いんです」
「な……なに？」
「あなたは幼い頃に両親を失いました。あー、殺されてしまったんでしたっけ。まだ犯人は捕まってないんですよね？」
得意げに勝手に他人の事をべらべら喋るこいつは……何なんだ？
「それでですね、あなたはある種の恐怖を抱いてしまった。誰とも分からない人間が、いきなり自分の両親を殺してしまって……それで、あなたの心の奥底には、全ての人間が自分の敵であるという感情が根付いてしまっている」
「な……なにをでたらめな！」
これ正解しているんでしょと確認をとるような、優等生がやりそうないやらしい笑みを浮かべる白い青年に向けて、怒った。
「まーまー、灯台もと暗しと言いますからね。自分の事はあまり自分では気づけないものです」
「うるさい！　不愉快だ、失せろ！」
右足で力強く地面を踏みながら怒鳴る。
ちょっと落ち着いて下さいよ、と白い青年はおどけた様子で後ろへ後ずさりを始めた。
「さっきからなんなんだ、訳の分からない、適当なことばかりほざきやがって！」

「んー、あなたはそんな粗野で乱暴な言葉を吐くような人ではなかったと思うのですがね。もっと素直で、心優しい少女だったと思うのですが」
こいつ……さっきからひょうひょうとした表情で適当なことばかり言いやがる！
「もっと素直になった方がいいですよ……いや、ならざるを得ないと思うのですがね」
「あぁ！？」
「あなたにだって大切なものはありますでしょ？　それが壊れることになりますよ」
赤ん坊をなだめすかすような口調でそう言った後、白い青年の体がカメラのフラッシュを焚いたように発光した！
思わず顔を両腕で覆って、そして白い青年が消えたことを悟る。
奴は……奴はどこに行った！？

「おーい、ノエル！」
あの白い青年が池の方にいるのではないかと思ってそちらを見ていると、後ろからアダムの声が聞こえてきた。
「大丈夫？　何かあった？」
さっきの事を言っているのだろう。
興奮の抜けきっていない私は、アダムにあのいけ好かない白い青年の事を話した。
しかし、アダムの反応は私の期待していたものと違った。
「……ノエル、もしかしてちょっと疲れてる？」
心配そうな顔をしてアダムはそう返した。
思わず私は思っていることを率直に口に出してしまう。

「なんでそうなるんだよ」
「だって……さっきからノエルの様子を見ていたんだけど、そんな人はどこにもいなかったよ？」

水力昇降機

今の私の心の中はとてもぐちゃぐちゃしている。
何と言えばいいのだろうか。言い知れぬ不安と、眼前に迫る危機の両方を体験しているというか。

私と相対していたあの白い青年は、幽霊の類の存在だったのだろうか。
私はその類の存在を「まぁいるのではないか」程度に捉えている、どちらかといえば少数派に属する人間だ。
しかし、あれは――本当に幽霊だったのだろうか。今までに幽霊を見たことがないから断言はできないが、あれはそれとは違うのではないか。

確かにあれはそこにいた。目の前で私の事をべらべらと喋り出した白い青年は、確かにそこにいた。
しかしアダムの目には見えていなかった。彼以外の人間達だって、冷めた目線で私を貫いていた。

もしかしたら、私は狂ってしまったんじゃないだろうか。
自分を貶めるような事ばかりを考え、それでいて周りの人間に友好的な態度を取らず、いつしか口を衝いて出る言葉には棘が含まれるようになってだ。
あんな悪夢だって見慣れてしまうような頭を持っているのだ、狂ってしまったと言われても驚きはしない。

そう考えることで、左隣を歩くアダムからの非難を緩衝しようと

考えていた。
きっと彼だって――そう、とても穏やかな彼だって、今は不機嫌であるに違いない。
多分きっとそうだ。自分の連れがいきなり狂うのだ、戸惑いを覚えるのは当然だ。

だが。私とアダムがコネクションタワーへと移るために、そのための設備がある場所に歩いて向かっている時だ。
沈黙を守っていたアダムの口が、不意にゆっくり動くのを見た。
「……きっといたんだよ、その……白い青年は」
ぽつり、という擬音が一番似合うような細い声でアダムは言った。

その言葉には、ある種の憐みを感じることは出来なかった。
頭のおかしい人間がいて、あーあー可哀想にねぇと小馬鹿にするような響きはなかった。
「きっといたんだ。君には見えて僕には見えなかった、そんな人はきっといたんだよ」
「……もしかしたら、私は疲れているのかもしれない。だって、そうでなきゃあんな幻か――」
いたんだよ。小さな、しかしはっきりとした声でアダムは私の言葉を切った。

周りに人はあまりいない。来園のピークを過ぎたのか、この第三ゾーンに大きな人垣を見ることは出来ない。
それも、アダムの言葉がはっきり聞こえた理由の一つかもしれない。
けれどもそれは、彼の確固たる意志がそうさせたのだと思った。
「僕は君を信じるよ。何があってもね」
立ち止まって、静かに私の目を見ながら言って、アダムは微笑んだ。

その微笑みにつられて、私も表情の緊張をほぐしてしまった。
「ははっ、ありがとうなぁ、アダム」
今の私には、それしか言葉が浮かばなかった。
ある意味で人間をやめているとしか思えない、この目の前にいるこの少年に他に何を言うというのだろう。

それから、アダムは歩いている途中に私達が乗る予定の水力昇降機についての説明を始めていた。
まず、昇降機とはエレベータの別称であることをアダムはおさえる。

次に、昇降機の構造についてアダムは簡単に言った。
この第三ゾーンを含む三つのゾーンには、数基の水力昇降機が用意されている。

それらのルートは、傾きの値の強弱こそあれど、多様な二次関数のグラフ――つまりは曲線だ――の形をしている。
そう。これら水力昇降機は、垂直に上下に動いて箱を動かすエレベータとは訳が違うのだ。
滑らかな曲線のルートで、どうやって直方体の形を取った箱が動けるんだ――私がそう尋ねると、アダムは水力昇降機には床板しかないと答えた。
床板だけとはどういう事かと尋ねると、アダムはもう少し詳しい説明をしてくれた。

そもそも、よく考えれば曲線状の筒を直方体の箱が移動できるわけがない。それ以前に設置すらできない。
よってカーニバルの昇降機は、分厚い床板を敷き、それを動かして人や物を運搬するというものになる。

では、曲線状の筒を使って板を動かすにはどうしたらよいか。アダムに言われてからだが、簡単な理屈だった。
液体の注入や気体で圧をかければ、このような場合の板は動く。物理学とかいうものは私の専門外だが（というよりは勉強が苦手なだけだが）、何となくのイメージは出来た。

気体はコストがかかるからか、それはカーニバルの昇降機には採用されていない。
それを聞かされた私は直感した。カーニバルの三つのゾーンを囲うように存在する、広大かつ綺麗な池。または湖が関係している。

そこの水をくみ上げて昇降機に利用している。だから、水力昇降機という名前がついている。私の予想とアダムの言葉が一致した。
水力昇降機は、なにも曲線状の筒と頑丈な床板しかないわけではない。
これを支える数本の支柱は、当り前だが存在しており、ちゃんとそこに重要な機構があるわけだ。

床板を上に移動させるには、池の水をくみ上げて筒に流す方法がある。なら、下に移動させるにはどうしたらよいのだろうか。
この答えも簡単だった。水を廃棄すればよいのだ。
とはいえ、下に多くの人間がいる場所に水を撒く訳にもいかない。

ここで支柱の出番がやってくる。
支柱には水を吸いだし、池に還元する機構を備えているからだ。

綺麗なだけでなく、こういうシステムにも欠かせないあの池の事を思うと、カーニバルを設計した人物は素晴らしいと思えた。

アダムの簡単で分かりやすい説明を聞いた私は、この素晴らしい設計をしたのは誰だと聞いてみる。

するとアダムは、何故か驚いた様子を見せて立ち止まり、恐る恐る口を開いた。

「あの……ホントに分からない？」

「分からないから聞いているんじゃないか。有名な建築デザイナーとか？」

私の言葉に、アダムは深いため息をついた。

……そんなに悲しませるようなことをしたか？

「あのね、覚えといてね」

「あぁ」

「この水力昇降機をはじめとするカーニバルのデザインの殆どはね、ベイカーさんがやったの」

ベイカー？　聞き覚えはあるが、どこで聞いただろうか。

「あぁ、誰か分からねーって顔してる……ほら、今日の夜にここで演説をする人だよ」

しっかりしてよもう、と不満を漏らすアダムの言葉を聞いて、ベイカーとは誰かを思い出した。

「あー！　元々公務員だった、あのベイカーだな！？」

「うん、思い出してくれたから良かったけど……」

「そうかそうか、カーニバルのデザイナーだから、演説をしに来るのか！」

心のどこかで引っかかっていた、ベイカーがカーニバルで演説をするという事実に一応の説明がついた私は、多分もの凄く喜んでいたと思う。

「もう忘れないでよ。もう、今日のカーニバルの件といい、どうして忘れやすいのかなぁ……」
「何か言ったか？」
「いいや。ほら、それよりもさ。そろそろ例の水力昇降機の乗り口だよ」

アダムとエレベータガール

やはり、水力昇降機の前も活気づいていた。
というのはちょっとおかしいかもしれない。何せ、カーニバルには人を笑顔にさせる力がある。

白い石畳が敷き詰められた地面は見る者にすがすがしい印象を与えてくれる。
赤い煉瓦を多く使った、大きなお土産屋の店舗は見る者に高揚感を与えてくれる。

ちらほら見かける、クレープなどを屋台で販売している少女のピエロ達がかわいい。
ゆったりとした、暖色ながら色数が少ないチェック柄の可愛らしいワンピース調の服。
彼女らはガーリィピエロと呼ばれているらしいことを、水力昇降機の前で数分の順番待ちをしている時にアダムが教えてくれたが、私から見ても彼女達は素直にかわいいなと思えた。

媚びることなく、しかし見たもの全てに好意を抱かせるような――語彙が無いというのは本当に腹立たしい。嫉妬してしまうくらいに、彼女達はかわいかった。それだけは間違いない。

しかしアダムは彼女達を見て鼻の下を伸ばすことはしなかった。
まぁ私がどれだけ頑張ってもいつも通りの優しい表情を浮かべる男なのだから、それは当然のことなのかもしれない。

その彼が例外の反応を取った、私から言わせてもらえば大事件並みの衝撃的な出来事が起きた。

水力昇降機の扉の前は少々人が並んでいた。
これ以外にもコネクションタワーへ移動する方法はある。池の中に透明な巨大チューブが存在していて、その中に電車用のレールが敷設されていて、地下鉄ならぬ水中鉄道――略称水鉄――が運行している。
高所恐怖症の人間ならば、水鉄を使えば問題なくコネクションタワーに移動できるだろう。そこに私はカーニバルのデザイン性の高さを見出した。

それを創造したベイカーという人間は、私なんかよりも更に高い見識を持っていたようだ。
水鉄を透明なチューブの中で運行させる理由は、池の中で生息する魚を眺めて欲しいというものだという。
事実、コネクションタワー深部には、池のコントロールを司る施設があり、つまりそれはカーニバルがある種の水族館的な要素を内包していることを意味している。

さらにベイカーはこれ以外の交通手段を用意している。
時間こそかかるものの、ゾーン間の移動をコネクションタワーなしで済ませることが出来る手段だ。
これを利用する層などいるのだろうか？　そう訝しんでいた私だったが、アダムの出した答えにため息が出るばかりだった。

高所恐怖症の人間がいれば、水が怖いという人間もいるだろう。
水が怖いという人間にとってはそれでも我慢できないかもしれな

いが、水中でないだけ幾分かましなのかもしれない。

ベイカーがデザインした第三の交通手段。それは池を使った渡し船だった。

池の環境に悪影響を与えないように、エンジンやＡＧＶコア――反重力の力を生み出す物質だ――を埋め込まない、あくまでも櫂を使ったゴンドラで人を運ぶ。

ベイカーという一介の公務員だった人間がアイデアであるとか発想力であるとかで、ずいぶん偉くなったのを知った。

もしかしたら私も、これといって取り柄のない私でも、何かをがんばれば彼ほどでないにしろ成長できるかもしれない。

知らず知らずのうちに、私の中にベイカーへの尊敬の念が芽吹いていった。

その時だ。ようやく水力昇降機に乗ることが出来るようになって、円筒状の――いや、デザインは缶詰に近いか？――昇降機内部に乗り込む。

「お客様がた、大丈夫ですね？　それではコネクションタワーまで昇る間、外の景色をお楽しみください」

今時珍しい、例にもれずにあの青色版の可愛らしい服を着た外見もイケてるエレベータガールが、私達乗客がおしくらまんじゅうにならない程度に人を乗せたのを確認してドアを閉める操作をした。

そこで気づいたのだが、昇降機内部は普通のエレベータのような形をしている。

平行四辺形に二本ラインを引き、三角形二つと四辺形一つに分解したのに近いかもしれない、と思った。

デザインは円だったが中身は四角だった。少し落胆しながら、しかし外が綺麗に見えることに気付いて落ち込みかけていた株が上がっていくのを感じる。

かなり速いスピードで水力昇降機は上昇していく。
下の景色がどんどん小さくなるのを見つつ、その傍らでアダムが私とは別の所に視線を向けているのを見た。
彼が何を見つめているのかが気になって、私もそちらの方を向く。青いエレベータガールが、そこにはいた。

衝撃だった。身体の急所という急所に衝撃を直接ぶち込まれるような、そんな衝撃を感じた。
何を感じたか、多分言葉にはできない。それくらい複雑な何かが、私の全てを貫いた。ような気がした。

「コネクションタワー、コネクションタワーでございます。お忘れ物が無いようにご注意頂き、カーニバルを楽しんでいって下さいませ」
水力昇降機の移動が止まり、私はそこであることに気付く。
既に外の景色を見ることが出来る範囲は過ぎていて、透明なチューブから見えるのは頑丈さを露骨にアピールしている鉄壁だった。

いつの間に握ってくれていたのか、アダムが私の手を引っ張る。
ほら、早く外に出ないと迷惑をかけちゃうよ――そう言われたような気がして、思わずすまないという言葉が口を突いて出た。
それに気づくことはなかったのか、アダムは先を歩き始める。周りに乗客は誰もいなかった。

そしてアダムはエレベータガールに、開いている右手を挙げた。
アダムの挨拶を受けた彼女は、少し戸惑った後ににっこりと擬音

がつきそうなくらいの穏やかな笑顔を浮かべた。
初対面の人間が出来る挨拶でないことは確かだ。しかし――アダムは彼女とどこで知り合ったのだろう？

水力昇降機を出たら、そこには照明があまり強くない通路が広がっていた。
近くの壁に埋め込まれている案内板を見る限りでは、私達はコネクションタワーの高層に位置しており、この通路は円形のもののようだ。
次に私は、木製の固そうなベンチを見つける。アダムに話を聞くのはあそこでいいだろう。
「アダム、ちょっといいか？」
「えっ？」
「ちょっと話がある。そこのベンチで話をしよう」
私はアダムの手を引いてそこまで連れていく。
戸惑った顔をしたアダムは渋々といった様子でベンチに腰掛け、それを見た私は彼の右隣に素早く座って同じくらいの速さで口を開く。
「あれは誰だ？」
「はぁ？」
質問が悪かった。こんな端的な言葉では、アダムが目を開いて首をかしげるのも無理はない。
「すまん。あのエレベータガールは誰だ？　アダムの友達だったか？」
そこでアダムはポンと手を打つ。えっとね、と言葉を続けて彼は言った。
「あのね、彼女は小学校の時のクラスメートだったエリーっていう子だよ」

「へぇ……よく覚えていたな。今でも付き合いはあるのか？」
「そうじゃないよ。でも、特徴のある顔をしていたからさ」
それはとっても可愛かったから、という意味で言っているのか？
どこか得意げな様子で答えるアダムを見て、少しいらっとしてきた。
「あの子、鼻の下のあたりに横に傷があるんだ。化粧で隠れていたから、ノエルは分からなかったんじゃないかな」
「っつ……そうか、そういうことな」
「そうそう。でも、エリーは僕を許してくれていたみたいで本当に良かった」
何の気なしに言ったのであろうその言葉は、しかし私の心にしがみついて離れなかった。

アダムが、誰にでも優しいアダムが、エリーとかいうあの女から恨みを買うようなことをしたというのだろうか？

「なぁ」
意識せずに口が開く。
ん？　とアダムがこちらを向いて、私の言葉を待った。
「アダムは……あのエリーって子に、何かやったのか？」
「何もやっていないよ。何もやってないから、どう思われていたのかなって」
「なんだよそれ。いいじゃない、ちょっとくらい教えてくれても」
たたみかけるように話す。すると、アダムの動きが一瞬止まったような気がした。

――もしかしたら、これは本当に触れてはいけなかった話なのではないだろうか。
そんな事を思っていると、ふーっと長く息をついたアダムが静かに話をし始めた。

「小学五年の時なんだけどさ、ノエルは覚えてるかな……ほら、合唱大会ってあったじゃない」
合唱大会。覚えている。何のためにやるのか全く意味を見いだせなかった、あのくだらない行事か。
私は頷いてアダムに答える。よかった、と返すアダムは言葉を選んでいたのか、少し間を開けて口を開いた。
「それで、エリーはピアノをやることになったんだ。ほら、合唱で欠かせないのは歌う人間とピアノの伴奏だからね」
私は頭の中に、薄暗い体育館の中でスポットライトを浴びる黒いグランドピアノを思い浮かべながら頷く。
「練習の段階では、ちゃんとエリーは課題曲を弾けていたんだ。でも……言いたいことは分かるかな」
アダムの落ち込んだ声の調子。それと、先を言いたくないのかどうかは分からないが、うつむき加減の顔の向き。
これで彼の言いたい事を察することが出来ないなら、私は彼の友人でもましてや親友でも何でもない。
「失敗したんだろ。きっと土壇場で緊張したんだ」
こういうことはきっぱり言ってやった方がいい。私は何の遠慮もなく、鋭く言った。
「そう、失敗した。彼女はね、練習の時は本当にうまくピアノを弾いていたから、みんながっかりしたんだよ」
「そうだろうな。そうだ、確かあの時は私とアダムは別々のクラスだったよな」
「小さい学校だから、一組と二組しか無くて、僕は一組に居たんだけどさ。それで……それから誰もエリーに話しかけなかったんだ」
そういうものかもしれない。多くの子供たちにとって大事な場面を台無しにしてしまったエリーは、ある種の戦犯と呼ばれても過言ではないのかもしれない。
それ故にエリーが受けた、幼稚で身勝手な罰というのが「エリーに対する無視を決行する」ことだったのだろう。

そこまで考えた私は、あることに気がついた。
アダムの顔から滝のように汗が流れ出ている。何をそんなに彼の心を刺激しているのか、私には分からない。

転換点

アダムは座っているベンチから少し腰を浮かし、チノパンについている目立たないポケットからとても薄い白いハンカチを取り出した。

それでもって額に湧いたおびただしい量の汗を拭う。それからゆっくり息を吐いて、同じくらいゆっくりに息を吸った。

いつまでもこうして、話をしないつもりなのだろうか。

それならば仕方がない。かなり無理をさせて聞きだそうという訳でもないし――そう考えた時だった。

「……あの子と会えたことは、僕にとっての転換点だったんだ」

囁くように言うので、確かにそう聞きとれたかどうかは定かではないが、アダムはそんなようなことを言いだした。

「転換点？」

「うん。僕は――学校だとか付き合っている友達とかにいい奴だって思われているらしいんだ」

うつむきつつ、静かに言葉を続けるアダム。

確かにそれは的を射ている発言だ。だって、私の口が急に悪くなってからも、今まで通りの穏やかなアダムでいてくれた。

「でもね。そうしようと思ったのは、ノエル」

私の名を呼んで一息止める。

それからアダムは背筋を伸ばして、すっとこちらを見つめる。

「なんか……顔についているか？」

私は急に焦りの感情を抱き始めていた。

アダムが私の顔を真剣な表情で見つめている。な、なんかちょっと、なんなんだ？

「君に嫌われたくなかったからなんだ」

えっ……はぁ？

「なに、人が真剣に話してんのに波とが豆鉄砲喰らったみたいな顔して」
「えぁっ？　……あぁ、ごめんごめん、あまりにもあさっての方向の答えだったからさ」
焦る私は情けない笑みを浮かべながらこの変な空気をとり繕うとした。
アダムが勇気を持って言葉を結び始めた。これを私が邪魔をしたなら、修繕しないといけない。
「そっか……そうだよね。いきなりそんなこと言われたら困るよね」
「こっちが悪かったって。アダムが謝ったら、私がどうしたらいいのか分からないよ」
「あぁそれもそうだね。けど久しぶりに見たよ、ノエルの困った顔」
さっきまでの緊張した面持ちを崩して笑うアダム。
それにつられて私も笑ったが、このまま彼が例の話をせずにはぐらかしてしまうのではないかと考えてしまう。
「うん。屋上に行こう」
「えっ？」
「確か屋上にはアイスクリームの屋台があったはずだよ。それにいい天気だし、こんな暗いところよりはそっちのほうが話しやすいかな」

コネクションタワーの屋上へ至るルートは二つある。
一つは塔の外周に沿った、安全は確保されているものの視覚上の

理由で危険な階段を使うもの。
もう一つは塔の内部にあるエレベータを使うものだ。

後者の方が圧倒的に人気は高い。だから私達はあまり人がいないであろう前者のルートを使うことにした。
あの円形の廊下から階段に出るための扉はある。そこを開けると、全くの無風と人工の冷気が私を出迎えた。
高所でありながら無風である理由は誰に解説されなくともすぐに理解できた。水力昇降機に使われているような透明なチューブが幅の広い階段を隙間なく包んでいるのだ。
さんさんと降り注ぐ日光のおかげでチューブの存在に気付いた。かなり透明度は高い。メンテナンスさえ欠かさなければ、これのお陰でここで死者が出ることはないだろう。

奇抜なものを作っておきながら、ちゃんと安全面も考慮している。
これを発案したりデザインしたのもきっとベイカーであるに違いない。顔をろくに思いだせないながら、私は彼の事を尊敬しつつゆっくり階段を上がっていく。
かんかんと鉄の階段が、私が足を置く度に返事をする。私の後ろでも同じ音が調子を少し変えて響いていた。
アダムは私の後ろを歩いていた。水力昇降機の時は平気だったのに、後ろから小さな悲鳴が途切れ途切れに聞こえてきたのが、どこか彼らしさを与えていた。

五分はかかっただろうか。けれども体力に自信のない私でも殆ど息切れを起こすことなく移動することが出来たのは、この階段の傾きが緩いお陰だと思う。
しっかりとした骨組みで、しかしゆるやかな坂を登るような感覚で階段を上がっていく。

途中で上から来てすれ違った人や、後ろから追い抜いてきた人もいた。彼らの顔に疲れの色は見受けられなかったと思う。

けれどもアダムだけは少しだけ息を荒げていた。

やっぱり怖かったんだなと思いながら、私は階段の終わりに出迎える鉄扉を押し開ける。

重量感と格闘しながらゆっくり押し開けていくと、鉄扉の向こう側から人々の楽しそうな声が聞こえてくるのが分かった。

主にそこは、十代前半の子供たちが多かったような気がした。笑い声がそれに近い気がする。

コネクションタワーの屋上は、それ全体が大きな広場になっているらしい。

中央にはホログラム式の巨大な地球儀がある。ちょうど第五大陸の南で何か事件が起こったらしいことが、虚像の地球儀の上でメッセージとして流れた。

第五大陸カーディナルに限らず、他の大陸にも言えることだが……そもそも大陸に責はないが、昔からこんな事件が起きることはある。反重力車両に搭載されるＡＧＶコアの暴走だ。

どういうわけか反重力技術に関してデマのようなものが流れているらしく、それに感化された人間がわざとＡＧＶコアを暴走させるらしい。

宇宙から飛来した特殊な隕石を解析し、その結果を元にしてＡＧＶコアは作られたという経歴をアダムから聞かされたことがある。

もしかしたら、宇宙からの物体というだけでデマが流され、こんな事件が起こってしまったのではないか。

くだらないデマのせいで、ＡＧＶコアの暴走――近くにいる存在が蒸発してしまう程の大爆発を誘発する――を起こそうとする人間がいる。嘆かわしいことこの上ない。

勝手に危ない騒ぎを起こし、それも消防の人間に鎮圧され、挙句の果てに警察のお世話になるのだから。

後ろからアダムが軽く肩を叩いてくる。

振り向くと、彼は誰も座っていないベンチを指差した。

地球儀の周りを囲うように色とりどりの花で構築された花畑と、それを眺めるために作られたであろう木製のベンチ。それと点在する何かの屋台。

私は頷き、彼の右手をとって歩き始めた。

アダムが指差したベンチに腰掛け、私は地球儀を見上げる。

ホログラフ式の地球儀は十二の大陸を乗せてゆっくりと回転を続ける。アダムの家にある２０００年度の小さな地球儀とはイメージが全然違ってしまった。

なぜ勃発したのか。どれほどの被害が出たのか――そんな記録すら残さない大戦争、言わずと知れた第三次世界大戦の爪痕を、ホログラフは映しだしている。

「さっきの話の続きなんだけどさ」

不意にアダムが私に話しかけてくる。そうだ、本題はそっちだ。

「あぁ」

「あの時の僕は……優しくもなんともなかったよ。誰かと喧嘩がしたくなくて、波風立てないように過ごしていただけなんだ」

「それ、ただただぼぅっと突っ立てるだけの案山子みたいじゃないか」

半分笑いながらアダムに言ってやる。

周りには多くの子供たちと少ない大人達が地球儀の虚像と綺麗な花畑を、そこらの屋台で買ったアイスクリームを食べながら楽しそうに眺めている。なにかギャグかつっこみの一つを入れてやらない

と。
「ははっ……結構いたいところを突いてくるなぁ、ノエルは」
「あっ、その、ごめん」
「いいんだ。もっとそれよりひどいことをやったんだから」
アダムの目線は、少し前の私と同じ所に注がれていた。
回っていくカーディナル。アダムはそれを悲しげに見つめているように見えた。
「ひどいことって、何をやったんだよ」
ほんの少しだけ続いた沈黙に耐えられなかった私は、感情を押し殺して半分笑いながら口を開いた。
ここで嘘で笑うのは間違っている。でも、アダムが何を言ってくるのか、それが怖いんだ。

カーディナルの幻が向こう側まで回ったところで、アダムはようやく口を開いた。
「エリーの鼻の下に傷を入れたのは僕なんだよ」
抑揚のない声。台本を棒読みしたような声。
「……そうなのか？」
「そうなんだ。ほら、合唱大会の次は発表会だったでしょ」
やはり一定の落ち込んだトーンの声でアダムは言う。
発表会。子供たちが自分で考えた演劇やダンスなどを垂れ流すアレだ。
「あぁ、それで……その時にやったのか」
「……そうだね。僕達の組は劇をやることになったんだ。何の話だったかは忘れたけど、昔から伝わる絵本の話だったと思う。童話だね、童話」
アダムはそこまで言って言葉を止める。
それからこっちを振り返って、私の目を不安そうな目で見つめながら続けた。
「それで、段ボールを使って背景を作ることになったんだけど、そ

れってかなり手間がかかるんだよね」
「あぁ。待てよ、まさか一組の連中はエリーにそれを押し付けたんじゃないのか？」
「そうだよ。その時になってようやく僕は、このままじゃいけないんじゃないかって思ったんだ」
だから当時のアダムはエリーの手伝いを申し出た。
アダムがこれを転換点だと言ったのだとすると、とても辻褄が合う。作業中に何かのアクシデントが起きて、アダムがエリーの鼻の下に傷をつけた。こんなところなのだろう。

アダムが話してくれた実際の話も、それと殆ど変らなかった。
カッターナイフで段ボールを切っていたら不注意でそれが飛び、エリーの鼻の下をきれいに裂いたらしい。
それ以来エリーはアダムを見るたびにきつく睨んできたという。
それはそうだろう。女の顔に傷をつける奴を当事者が許すわけがない。

しかしアダムが「君に嫌われたくなかったんだ」と言った意味が分からない。そこだけが腑に落ちない。
「僕は――」
全てを話してうつむいていたアダムが、呟くように何かを言ったのを聞く。
「え？」
「――エリーの味方になりたかった。仲間外れを喰らった彼女がどうしても不憫で不憫で仕方がなくて、発表会の役割分担の時がチャンスだと思っていた」
小さな、しかしそれでいて何かが宿っている抑揚のある声。アダムはそんな声で言葉を紡いでいた。
「あの時まではエリーは僕に何か話を振ってくれるようにはなっていたんだ。だけど、それからは……嫌われちゃったよ。だってさ、

女の子の顔に傷を作っちゃったんだからね」
「……あぁ。あまり許されるべきことじゃないよな」
「君もそう言うもの、そうなんだろうね……それでね、もう僕はこんな目に遭うのがいやだって強く思った。せめて、近くにいる人にだけは心から優しくしようって思ったんだ」
アダムの言う近くにいる人が私だった。そうか、だからアダムは私に嫌われたくなかったのか。

囁くように小さな、しかし満ち満ちた声でアダムは私に教えてくれた。

――アダムの親友でよかったと、彼の大事な話を聞いた私は強く思った。

お昼頃、第一ゾーンにて

いま、私は再び水力昇降機に乗っている。胸に期待と、アダムの話を聞いた幸福感を抱きながら。

下に向けて動いている昇降機は、先に乗ったそれとは別のものだ。行き先は第一ゾーン。カーニバルをカーニバルたらしめている最大の要因。

遊園地と聞いて想起するもの全てが置かれてあるから、ここだけも最大級のそれと言えるのだろうけど、カーニバルはそれでは終わらない。

レストラン街となっている第二ゾーン。最初に訪れたお土産売り場となっている第三ゾーン。そして三つのゾーンを結ぶコネクションタワー。

これらを包囲するように透き通った綺麗な水を湛えている、池とも海とも呼ばれる巨大な湖。

こうして考えてみればカーニバルは規格外の大きさを誇ることが分かる。

これら全てを設計したわけではないのだろうが、さらに詳しい経緯を知っているわけではないが、設計に携わったベイカーは凄いと思う。

一介の公務員に過ぎなかった男の頭の中には、こんな夢のような場所を作り出すアイデアが入っていたってことになる。あぁ、羨ましい。

「ねぇノエル、何をそんなにたそがれちゃってるのさ」

「これが持つものと持たざる者の違いだよな……」

周りに客はいない。いるとしてもエレベータガールのガーリィピエロが一人だけだ。

だから普通に私の声はアダムに届いた。それだからこそ、彼が怪訝そうな表情を浮かべるのは無理のないことだと思えた。
「何を持つって？」
「すまない、こっちの話だよ……そういえば、これからどうするんだった？」
「なんかノエルって忘れっぽいよね。ほら、第一ゾーンに行って観覧車に乗りたいって言ったのは君なんだよ？」
少しだけムスッとした様子を見せながらアダムは教えてくれた。
本当に怒っているわけじゃない。ただただ、そういうネタを振ろうとしてふざけているということを、私はちゃんと理解している。
「すまないなぁ、ちょいと老化が激しいのかもしれない」
「頼むよ？　だってノエルは二十歳にもなっていないんだからね？」
分かってるよ。半笑いで返して、私はアダムの顔を見てみる。
美男子には程遠い、あまりそっちの印象の強い顔ではないけれども。私が好きな顔は、やっぱりアダムが笑っている顔なのだと改めて思った。

水力昇降機に乗ってから一分も経たずに私達は第一ゾーンへの入り口の一つにたどり着いた。
エレベータガールの案内の言葉を受けつつ、アダムに先導を任せて私は開いたドアから外に出る。
外に出た私達を出迎えたのは、水力昇降機の乗り入れ口の付近を防護するアーケードがある場所だった。
少し強くなったようなきがした日差しと予想通りの規模の人間達と、そして心躍るような音楽がそこには散らばっている。
とても良いスピーカーを使っているに違いない。大勢の人々が立

てるどよどよした音よりも、私の耳にはそちらの方が耳に入っていく。
行進曲らしい、心を煽ってくるような鼓笛隊のビートとメロディ。
そこにトランペットを想起させる楽器が、底抜けに明るい少年漫画の主人公を連想させるように鳴り響いていく。
そのおかげで未だに水力昇降機の乗り口から殆ど動いていないというのに、私は笑顔を隠しきれないでいた。
先を歩くアダムがこちらを振り向く。少し不安そうに見えたその表情は私を見るとすぐに消える。
彼は笑顔を浮かべながらこちらに近づき、右手で私の左手をとりながら言った。
「さぁ行こうノエル！　浮かれた人が多いからね、離れないように一緒に行こう！」
「あぁ。最初からメインディッシュにしようか」
「ということは観覧車だね？　かなり待つかもしれないからちょっと提案させて欲しいな」
アダムに軽く引っ張られる形で歩きながら、私はアダムがそう言ったのを聞いた。
既に日よけの役目をしているアーケードの場所は抜けた。
だからあの行進曲はもう聞こえない。聞こえるのは人々のざわめきだった。
「提案って何だ？」
私は周りのざわめきに負けないくらい大きな声で話しかける。
「この先に行くとコーヒーカップやメリーゴーランド、それにジェットコースターが待ち構えているんだけど」
「あぁ、それで？」
「多分待ち時間が結構長くなると思うんだよね。それで、そこにあるお店でお菓子買っていこうかなって思ってね」
アダムは右手にある一つの露天店舗を指差す。そこのラインナップからは、よくみる駅の売店から菓子類のみを抜き取ったような印

象を受けた。
ふむふむ、確かにこの人の多さでは観覧車一つ待つのにどのくらいかかるか分かったものじゃない。
それに時間としても正午が近い頃だ。普段なら、もう少し時間が経てば昼食の時間になる。それを意識した途端にお腹がきゅっとしまったような気がした。
「それはいいな。じゃ、私はプルュッチェルチョコレートを。アダムはどうする？」
「僕は……いいや、同じものにしよう。……すいませーん！」
アダムはちゃんと私の手を握りながら露天商の元へ近づく。
――うん。なんだかとてもいい気分だ。前からそれは感じていたけど、今はとてもいい気分だ。

ハローメナス

長い。とにかく長い。いつまでたっても終わらない。
長蛇の列とはきっとこのことを言うのだろう。
でも、そこでプラカードを掲げてうろつくスタッフが示す通り、一時間待っても観覧車に乗れないというのはどういうことだ？
「やっぱり並んじゃうよね……ノエル、ずっと立ちっぱなしだけど脚は大丈夫かい？」
「ありがとう、大丈夫だ」
「そうは見えないけど……ほら、そこに開いているベンチがあるから座ってきなよ。位置取りは僕がやっておくから」
「そんなに心配しなくていいよ、平気だから」
正直なところを言えばちょっと辛い。
私は運動が苦手だし、こうしてずっと立っているという機会も与えられたことがない。脚の疲れをほぐすのに何度か足踏みをしているが、まぁ大丈夫だろう。

――いや、それは楽天的な思考に他ならないのではないだろうか。
さっきアダムが買ってくれたプリュッチェルチョコレートはもう底をついてしまっている。
私が列の中で位置の確保をしている間に、アダムはゴミ箱にそれを捨てに行ったのだけど――

「ん？　……ノエル、あと十分くらいで乗れるかもしれないよ」
そうか？　まだ並んでいる人は多いからそれはないんじゃないか――そんなことを言い返すと、アダムは逆に尋ねてきた。
「一応、今日はカーニバルで何が催されるのかってことは調べていたんだ。で、思いだしたんだけど、聞いても観覧車に乗りたいと思う？」

「どこで何が催されるのかを聞かないと何とも言えないけど、そんなに面白そうなものがあったか？」
「うん。ノエルが好きな歌のグループ……バー、バーなんとかだったっけ」
「バーテックスか？」
それそれ、とアダムの言葉はそこで途切れてしまう。馬鹿でかい声が横槍を入れてきたからだ。

その声は空から響いていることに気付いた私は素早く空を仰ぐ。
空には黒い点が――三つか？　カーニバルにある三つのゾーンの上空に一つずつ黒い球体のようなものが浮かんでいるのが分かった。
スピーカーだね、とアダムが私に教えるように言うと同時に黒い球は大きく空気を震わせる。
＜本日はご来園頂き誠にありがとうございます。これより、第二ゾーン東側ステージにて大人気ロックバンド、バーテックスのライブプレーを開催します。入場料等は無料となっておりますので、多くのお客様のご来場をお待ちしております。繰り返します――＞
馬鹿でかく、それでいてゆっくりとした女の声が空から響いていた。

確かにアダムが私の心配をした理由としては成立はしている。
女性を中心に人気を集めるロックバンド、バーテックス。世間一般にはメンバーの顔面偏差値が良いだのなんだの言われてるが、私が良いなと思うのはそこじゃない。もっとこう、言葉にするのが難しい何かを持っていると感じたのだ。
あえて言葉にするならロックミュージックに対する情熱。ひたむきにそれに傾倒し、情熱的な曲を書いて歌って演奏して――その姿をブログなどを通じてみる機会があり、それがきっかけでファンになったのだ。
そのバーテックスが野外ライブを開く。行ってみたいという衝動

はあったが、今はアダムがいる。彼と過ごす時間の方が面白いに決まっている。
「いや、観覧車に乗ろう」
「いいのかい？　早めに行かないと席なんてなくなっちゃうよ？」
「いいんだ。私はアダムと観覧車に乗りたいんだから」
「嬉しいことを言うねぇ。周りを見てごらんよ、僕らの年代に近い女の子の多くはここを出てっちゃった。やっぱり顔面偏差値って凄いなぁ」
　僕なんか５０もいってないよこれ、なんてアダムが拗ねたように言う。
　もちろんこれはギャグの類だということは分かっている。私は笑いかけることにした。
「ふふっ、あと五分もしないで乗れるんだ、ご都合主義じみた催しに感謝するよ」
「そうだねぇ、あと少しであれに乗れるんだもの。わくわくが止まらないや」

　上空の黒い球体型のスピーカーが空気を震わせてから五分ほどが経って、私とアダムは観覧車のゴンドラの中で空からの景色を眺めることが出来た。古めかしい観覧車に乗るとよく聞く、身の危険を感じさせるような軋む音は全くと言っていいほどない。
　極々滑らかに、しかしゆっくりとゴンドラは上がっていく。私たちは終始ため息をつきながら下ばかり見ていた。
「凄いなぁ、もう人が小さく見える」
「これでまだ三分の一も上がってないんだったか？　ホントに馬鹿みたいに大きいんだな、この観覧車」
　ゴンドラのドアについている小さな電光掲示板には、現在の高度

と残り時間が示されている。まだ十分以上も時間は残されているし、ゴンドラは上昇を続けていく。
それにゴンドラの中には微弱ながら音楽が流れている。恐らくはフルートの演奏による、心躍るようなメロディラインはどこかで聞いたような気がする。どこだったろうか、思い出せそうで思い出せない。
「さっきから流れてるこの笛の曲……前に聞いたよな？」
「そうだねぇ。確かあれはこっちのゾーンに来てすぐのことだったと思うんだけど……そうだ、分かったよ」
アダムが手をポンとたたく。妙に芝居がかった仕草だとは思ったが、これを素でやっているということは分かっている。善人は時として奇妙な一面を見せるものだ。
「水力昇降機を降りてすぐさ。あのアーケードのところ」
「あっ、そこか！　というと大体あのあたりだよな？」
ゴンドラを揺らさないように私は身体の向きを変え、外のある地点を指さす。
アダムも腰を浮かせて覗きこみ、大体はそうだねと頷きながら言った。
「……あそこにいるのは全員バーテックスのライブ見たさに戻ろうとしている奴だな」
「だろうね。水力昇降機の運搬能力って全部使ってもあまり高くないし、水中鉄道を使っても渡し船を使ってもすぐには第二ゾーンへは行けないよ。多分あの人たちは立ち見も出来ないんじゃないかな……」
目先のことにとらわれてはいけない。何故なら私たちのように機会を横取りするように動く輩が現れるからだ。そのことを教訓として深く胸に刻み込みたいと思っ――

ガンッ！

どこかで金属板が強力な力で叩かれたような気がした。
電光掲示板に目をやる。高さ１２０メートルにしてようやく折り返しに入ったのが分かった。
こんこんとゴンドラのドアを作業着を着た配達員がノック。高いお空からコンニチハ、この郵便物にサインをお願いします――そんな馬鹿げた妄想を振り払うように頭を軽く横に振る。
「どうしたの、大丈夫かい？」
「……さっきゴンドラに何か当たらなかったか？」
「ん、何の話？」
結構耳に痛い音だったと思うし、アダムの聴覚に問題があるという話を聞いたことがない。まさか、幻聴？
「金属の板を思い切りハンマーか何かで殴ったような、そんな音だよ」
「……僕には聞こえなかったよ」
何を言っているのか分からないという様子を見せるアダム。
そうだ、きっとこれは幻聴なんだ。さっきの幻覚みたいなものの一種で、そんな暴力的な音が聞こえたにすぎない。
「そうだよな、そんな音が聞こえるわけが――」

ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！

「――本当にこれ、幻聴か？」
「やっぱりノエルには聞こえるの？　その、変な音が？」
「聞こえるなんてものじゃない！　だめ、もう気が変になりそう！」
きっと何かがゴンドラの外に張り付いている！　そうでなければこんな音を立てる原因なんてある訳がないんだ！
私は厳重に錠がかけられたゴンドラの出入り口に近づき、その上にある窓ガラスから外の様子を伺う。そうだ、何かがしがみついたりどこかから物が飛んできてぶつかったりしない限り――

ガンッ！　ガンッ！

「きゃあ！」

「ノエル、落ち着いて！」

出入り口のあたりから突き飛ばされたように私は尻餅をついてしまう。

そのせいで少しだけゴンドラが揺れる。身体中にある種の気持ち悪さが走り回って――いや、待て。

さっきから幻聴のように聞こえている、不安を駆り立てる音はゴンドラに影響を与えていない？　ということはこれは本当に幻聴なの？

「アダム、なにか私、どうしようもなく怖いの」

「……落ち着いて話してごらん？　一体どういう音が聞こえるんだい？」

「金属の板をハンマーとかで殴ったような、よく映画とかで聞くような音……」

深呼吸をする。あれが幻聴かどうかはどうでもいい、今の私に必要なのは冷静さとそれを取り戻すことだ。呟いてそれを反芻する。ゆっくり立ち上がって私の席に戻ろう。

「それは良いですよ、冷静になって状況を顧みるというのはとてもいい事ですからねぇ！」

これも幻聴か？　上から聞こえたこの声も幻聴だというのか？

「ノエル、このゴンドラは雨漏りしないように設計されているし、第一雨なんて降っていないんだけ――」

「そこにいるのは誰だ、あの時のお前か！？」

理屈で説明することが難しい全身真っ白の青年。それが全てこの幻聴を引き起こしているのだとしたら、それだと説明がつく。

「そうですそうです。あっ、今からそちらに顔出しますから。ちょっと待ってて下さいね」

言うが早いか、ゴンドラの天井から何か白いものが落ちる。

それは鋼鉄の床にぶち当たったはずなのに何の物音も立てない。間違いない。目の前にいる白い青年はある種の霊的な存在なんだ！
「こんにちは。またお会いしましたね」
「……お前、お前は何なんだ！？」
慌てるな、冷静になれ――理性的になろうとする私の心がそう告げる。向こう側からはアダムの声が聞こえるが、何を言っているのかが分からない。
「あなたにお届け物があります。受け取ってください」
お前、両手には何も持っていないじゃないか。なにがお届け物だよ、どういうつもりだ？
「そう不思議そうな顔をしない。さ、受け取ってくださいね？」

白い青年が言った途端に激痛が走る！　お腹だ、お腹が避けて飛び散りそうなほどに痛い！
「うぅっ！？」
下を見れば、白い棒が私のお腹に突き立っている。いや、それは棒なんかではない。目の前にいるこいつの腕だ！
「がぁっ、かっ……うぅっ……」
「ノエル！？　ぅうわっ！？」
赤い何かが私のお腹から噴き出す！　これはなんだ、血か？　血なのか！？　それは白い青年を通り抜けてアダムに降りかかってしまったのか！？
「すみません、時間がないものでこのような手口を取らせていただきました」
「な……なに……？」
「せめて使える程度に育っていることを願います。いまあなたに渡したものは、近い将来役に立つものです。時がくれば、また」
白い青年の手が私のお腹から引き抜かれる。
それと同時に堰を切ったように血が噴き出し、それがゴンドラの中やアダムの体を汚していく。白い青年の不敵な笑い声とアダムの

悲鳴がフェードアウトしていく。

変化

針が肌に刺さるような小さく鋭い痛みが走る。
しかしそれがどこから現れたのかが分からない。ただ一つ分かっていることは、この痛覚が私の意識の目覚めのきっかけとなったことだけだ。
薄く目を開ける。……駄目だ、眩しくてこれ以上は目を開けていたいとも思えない。
「あっ……目が覚めたのかい！？」
近くで大きな声がする。聞きなれた、しかし焦りを含んだようなアダムの声だ。
背中を柔らかいものにゆだねて横になっているらしい。消毒薬の匂いもする。よかった、五感は生きている。
「……アダム？」
「よかった、もう目を覚まさないんじゃないかって……！」
目を瞑っていても入ってくる光が少なくなる。目を開けると、そこには涙を浮かべたアダムの顔があった。
「だってノエル、あんなことがあって……もう駄目かもって」
「なんだ、その……あんなことって？」
「覚えてないの？　ノエルはいきなりお腹から血を噴き出して、とても痛そうにして、気絶しちゃったんだよ？」
――記憶が蘇生する。そうだ、あいつが私の身体に手を突っ込んだんだ！
「あの時ゴンドラの中にいた奴はっ、はぁっ！？」
勢いよく起き上がろうとして、しかしお腹に激痛が走る！　お腹に手を押さえながら荒く息をしつつ、私はゆっくりと横になることした。
一瞬だけ起き上がった時に分かったが、どうやらここは医務室か何からしい。遊園地のような人が多く集まる所にけが人はつきもの

だ。こうなるまでのけが人は想定されていないのだろうけど。
「まだ起き上がらない方がいいよ、だって沢山の血がぴゅーって――」
「あの時私たち以外にも誰かがいたよな、見たよな？」
「いいや、いきなり君のお腹が破裂してぶしゃあって……でもよかったよ、ノエルが目を覚ましてくれて」
白シャツを背景に揺れる赤いネクタイを見つめる。
待てよ。何か大事なことを忘れてないか……
「どうしたの、そんな渋い顔して……まだ痛い？　無理しないで横になった方がいいよ」
「いいや、歩くくらいならできそうだ。出来そうなんだけど……」
私の体を見る。今日の服装は確か、胸元の開いた黒いワンピースに薄い白の上着だったはず。
上着はどこかに掛けられているからか、今は身につけてはいない。ゆっくりと上体を起こして自分の体を眺めてみる。華奢な、それでいて理想的なボディラインと謳われる体型に遠いことはない身体を黒のワンピースが包んでいる。
「包んでいる。ううん、隠している……」
「ん、ノエル？」
「隠している……いや、隠れている？　ありえない、そんなはずが……」
「どうしたの、さっきからぶつぶつ呟いてるけど」
アダムの声でもう一度目が覚めたような気がした。そうだ、こんな事があり得るはずがないんだ！
「もう一度聞かせて、あの時私に何があったっていうの！？」

納得できる話ではない。だけど、こうして生きているのだからよしとしよう――コネクションタワーの中で最も人気の少ない場所である医務室がある廊下を歩きながら、私はそう考えることにした。
白い青年が私のお腹に手を突っ込んで攻撃を仕掛けてきた。だから観覧車のゴンドラと居合わせていたアダムは血にまみれてしまった。
ということは私の服が破れていなければならない。なのにどういうことか、綿を素材としているこの服に傷やほつれなどは一切見られない。
アダムが言うにはいきなり私のお腹が爆発したという。時限式かスイッチ式かは別として、それでも爆弾という線はナンセンスだ。だけどこう考えないと辻褄は合わない。現実に起きた事象のみを考えるならば。
私が見た現象も取り入れて考えるなら、こんなシナリオが筋は通っている。
白い青年に私は攻撃された。だが、彼は何らかの特殊な方法で服を貫通させずに手を突っ込んでいた。荒唐無稽もいいところだが、これしか説明のしようがない。
「……ごめん、言い忘れたことがあったんだけど」
「ん？」
「僕達の服は洗濯してもらったんだ。それで、その……」
何を言いたいのかが分からない。左隣を歩くアダムは誰もいない鈍い光沢を放つ鋼鉄の壁を見て口をもごもごさせているらしい。
「……その、こっちに運び込まれた時に洗濯をしてもらって、気を失ってる君は看護師さんに脱がされていたんだけど、その……」
「見たのか？」
言いたいことは分かる。もう後にしてしまった医務室やその内にある細かな部屋の中でアダムは私の――を見てしまったという訳だ。
「悪気はなかったんだ……ごめん」

「別に。タイミングが悪かったからそうなったんでしょ」
内心穏やかではないのは当り前だ。偶然の出来事で、アダムが故意に見ようとしたわけではないのは分かる。彼の性格上それはあり得ない事だというのは分かっているし。
それに、アダムになら見せてもいいという訳ではないけど、こういう事故で見えたというなら許してやらないでもないというか……だから、そんなうつむいて歩いてほしくはない。
「……それに、血にまみれた服を洗ってくれたっていうんだろ？どのクリーニング業者がやっても短い時間でここまでやるなんて……ん、時間？」
「……どうしたの？」
「いまは何時だろう、分かる？」
ようやくこちらを振り返ってくれたアダムの表情が凍りつく。そうか、チノパンのポケットに現金を持ち歩いているだけで他には何も持ってきていないんだ。
私は間を持たせるためにあー、と声を出しながらショルダーバッグに手をかける。中には携帯通信端末――正式名称が分からないから携帯と呼んでいる――があることを確かめてこれを取り出す。
右手に長方形の板の形をした携帯を持ち、待機状態にしておいたモニターの電源を入れる。すぐに今の時刻が分かった。
「なにもう……三時だって！？」
「もうっていい方はないよ。だってノエル、たったの二時間くらいの時間であんな傷が直ったんだよ？」
あの傷が二時間で？　あぁそうか、今の時間を顧みればそういうことになるんだ――なに、二時間であんな傷が塞がった？
「そういえばそうだ、あんな傷を負ったのに……どうして？」
「それは僕も分からない。なんでも、勝手に傷が凄いスピードで塞がっていったんだって。お医者さんだって不思議がってたし……」
「傷が治ってはい良かったねって話じゃないぞこれ、おかしい、ありえない……」

ガンッ！

私の顔が固まったのが分かる。あの時、ゴンドラの中で聞いた金属が叩かれるような音が聞こえる。……奴か？

「そうですよ、あなたはちょっとだけ違いますから」

予想していた奴が、鋼鉄の床からすーっと姿を現す。口を開いてあの嫌な音を発音しながら。

「私は正真正銘の地球人だ。お前みたいなわけの分からん奴と一緒にするな！」

「あららら、あなたにそんなことを言って頂けるなんて光栄です。いやでもそんな、怯えないで下さいよぉ」

白いスーツの襟を直しながらわけの分からん化け物じみた青年は言う。なんなんだよ、こいつ！

「先の一件は悪かったと思っているんですよ。ですが、あれしか方法はありませんでした」

「……」

「時が来るまで、そこにいるボーイフレンドと仲良くやってください。その時になれば、また現れます」

私の体が震えているのが分かる。もう駄目だ、こいつには恐れを抱いてしまうようになってしまったみたいだ。

「ねぇ」

震えが止まる。その声の主を知っている。アダムだ。

「君がそこにいるのは分かる。姿は見えなくても、誰かがそこにいるのは分かる」

「……なんと」

目を開き、体を少し反らせて驚いている様子を見せる白い青年。私だって驚いている。だって、アダムは何も見えなかったって――

「ノエル、今分かったよ。君が何かを見て怯えているっていうのは分かっているし、なんとなく第六感で感じ取ってはいるんだよね…

…」
――私の手をとってアダムが低く言う。彼の言葉と手から伝わる体温が、私の震えを止めてくれている。
「君、ノエルに何の用があるのか知らないけど、次に彼女に何か変なことをしたら僕が許さない」
「アダム……」
「僕はノエルと違って君の姿を見ることが出来ないけど、感じ取るくらいなら出来る。それだけだから何か報復は出来ないけど、もしも君がノエルに何かをしてそのせいで大変なことになったら僕は君を許さないから」
めったに見せない怒りの表情。眉はハの字に、眉間には皺が寄って、柔和そうな丸い目が細くなっていく。顔が細かく震え、だんだん色が赤くなり、目が充血していく。
「良いお友達に巡り合えたようですね、羨ましい」
「早いとこ消えてくれ。これ以上ノエルを怯えさせるな」
「……この人、こんな冷徹な声出せましたっけ。中の人が違うんじゃないんですかぁ、まぁ良いんですけどねぇ。また会いましょう」
あの時のように白い青年の体がまばゆく発光し、腕で顔を覆い隠してしまった後には私とアダム以外に誰もいないことを知る。
「消えたみたいだね、やっぱり姿は見えないけど」
「ということはさっきの閃光も見えてなかった？」
「見えなかった。この天井の照明以外にあったの？」
とぼけている様子ではないことは分かる。それだけに、アダムが怒ったということの希少性が浮き彫りになった。

一つの決断を下すべきなのかもしれない、と切に思う。
このまま白い青年と対峙するたびに震えるのは嫌だ。もう会うことは無いかもしれないが、最低でも一度は奴から接触を図るつもりらしい。
いいや、そんなことが理由じゃない。あの時アダムが私の手をと

ってくれたのが、やけに心に響いたからだ。
「……大丈夫かい、気分は悪くない？」
「気遣いはいらない、大丈夫だから。でも……」
最初に白い青年が言った言葉。全ての人間が敵であるという認識。それはあながち間違ってはいない。
その認識をはっきりと自覚したのは義務教育期間中のことだった。私の身分は養子とはいえ、クロイス・コーポレーションという大企業の社長の子供である。腹に一物を持って近づく人間は少なくなかった。
それは覚悟するようにしていたのだが、まさかクラスメートからもそんな目で見られ、近づかれるとは思っていなかった。数は少なくも多くもなかったが、未熟な私の心に全ての人間が敵であるという認識を植え付けたのはそう難しいことでも無かった。
アダムにも同じ認識を持っていたということを私は恥じる。だってそうなのだ、私は周りの人間から距離を離すためにこんな言葉づかいを続けてきていた。それは認める。これをアダムにも向けておいて、しかしそうとは気づこうともしない私のずうずうしさに自分で呆れてしまう。
きっと私はアダムに甘えていたのだろう。彼にならどんな言葉を投げかけても、いつも一緒にいたのだから離れないだろうと。
だけど、それは間違っているように思った。いま思った。だからもう、こんな言葉づかいをするのは止めよう。自分からあのぬくもりを手放すきっかけを作るなんて馬鹿な真似はしたくない。
「ね、ねぇ……」
「どうしたの、ノエル」
「もう三時だったのよね？」
昔の私のように、普通の女の子が話すような口調にすることがここまで勇気のいることだとは。口が震えて、うまく声が出ない。
「もしかして、話し方を変えてみた？」
「……うん。もう、あんなとげとげしい話し方は疲れちゃった」

もしかしたらアダムは私の口調が変わっていった経緯に気付いているかもしれない。そう仮定しても違和感が無いことに軽く恥じらいを覚える。

「もう三時だからちょっと遅くなるけど、一緒にお昼ご飯を食べに行きましょうよ」

「そうだね。それじゃ、第二ゾーンに行ってみようか。時間もずれてるし、順番待ちは無いと思うよ」

アダムが先を歩く。いつもの柔らかな表情に加えて輝きが見えたような、そんな気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2062s/

カーニバル

2011年7月12日03時35分発行